

東アジア児童文学のゆくえ⑥

— 東アジア児童文学としての日本児童文学

成實 朋子

* 中国における日本書ブーム

東アジアのどの都市へ行っても、必ず一度は書店をのぞくことにしている。中国や台湾の書店で新刊チェックをするのははや習慣だし、数年前から韓国語を学び始めたので、韓国の書店で、韓国語の知識を総動員してハングルを解説するのも楽しい。

もつとも最近はこの地域でも、ネット書店の方に勢いがある、実店舗型書店は年々衰退している。特に中国では、都市部の家賃高騰のあたりもあって、民営の小規模書店が次々と移転、閉店してしまっていて、がっかりすることも少なくない。今春、久々に南京を訪れて、お気に入り「先鋒書店」が以前と変わらず営業しているのに安堵したところである。(ちなみに南京の先鋒書店は、「中国で最も美しい書店」とも言われる個性的な書店である。南京に行くことがあれば、是非行ってみてほしい。)

しかし今回先鋒書店の店頭では、これまで以上に多くの

日本人作家の本を目にした。村上春樹の『騎士団長殺し』(新潮社、二〇一七年)などは、二〇一八年二月に翻訳版『刺殺騎士団長』(林少華訳、上海訳文出版)が出たばかりということもあり、店頭が一番目立つ所で平積みになっていた。

近年、中国では日本作家の作品が次々と翻訳されていて、ちよつとした日本文学ブームである。特に村上春樹と東野圭吾の人氣は高く、例えば中国アマゾン(亞馬遜)を見てみれば、二〇一七年度のベストセラーランキングに、東野圭吾は『ナミヤ雑貨店の奇蹟』(『解憂雜貨店』(南海出版公司、二〇一四年))と『白夜行』(南海出版公司、二〇一三年)が、村上春樹はエッセイ集『職業としての小説家』(『我的職業是小說』(南海出版公司、二〇一七年))が入っていた。

子どもの本の世界も例外ではない。「文化通信」は二〇一八年二月一三日付けのネットニュースで、「ポプラ社、中国法人が2年で売上倍増」のニュースを伝えたが、この